# 西アフリカ島嶼国カーボヴェルデの無形文化遺産モルナにみる文化的クレオール化の検討

青木　　敬

## 1．序論

「クレオール」ということばがもちいられたのは、大西洋奴隷貿易が開始した15世紀末まで溯ることができる。それはポルトガル人とスペイン人をはじめとする西洋人による黒人奴隷制および植民地支配の時代に端緒をなしている。そのためクレオールとは、植民地生まれの「野蛮人」によって話される「不完全な」ヨーロッパの言語であり、「プリミティブで劣った」ものという、極めて侮蔑的なニュアンスとしてとらえられていた。しかし、そのニュアンスも時代の進展とともに変化していった。

19世紀後半になると、言語学の研究対象としてクレオールがすこしずつ扱われはじめ、20世紀中葉にはピジン・クレオール語研究が脚光を浴びる[1)]。このようなピジン・クレオール語の文法構造を対象とした研究成果が実ると、クレオール語はヨーロッパの言語同様、複雑な言語体系をもった自然言語であると認められるようになった。とはいえ、20世紀後半は主にアフリカ各地で民族開放闘争や独立運動が高揚しはじめた時代であり、旧宗主国側によるクレオールの人びとにたいする偏見や侮蔑・差別的なニュアンスが払拭されたわけではない。それどころか、この問題は未だに深刻である。

こうした政治・歴史・文化におけるクレオールの問題についていち早く注目したのが、『クレオール主義』（2017）の著者で人類学者の今福龍太である。同書で今福は、植民地における土着性（場所論）と植民地において

生じた混淆性とクレオールの可変的アイデンティティ（越境論）について論じたうえで、以下にみるように、新たな思想として「クレオール」の現象（クレオール論）を提示している。

> 「民族的・言語的・文化的アイデンティティ」という固定化された帰属の領域から脱したところでつねに、＜クレオール＞という現象が生成することの確認は、必然的にわたしたちをノン・エセンシャリズム的認識論の彼方に広がる、新しい思想的実践としての＜クレオール主義＞の地平に導いていく。（今福 2017：185）

こうした新たな思想を展開することは、クレオールにたいする侮蔑・差別的なニュアンスを反省的にとらえることを可能とする。

本研究の出発点ないし目的はこの先にある。すなわち、文化がクレオール化していくプロセスがなにか、文化がクレオール化していく現象をなぜクレオール社会において必要とされるのかという問題である。この問題を理解するために、本研究ではまず、クレオールの語義を整理し、文化がクレオール化していくプロセスを明らかにする。最終章では、西アフリカ島嶼国カーボヴェルデ（図１）の歌謡モルナの今日的価値をみることで、日常的な実践としてのクレオール化の実態を検討する。

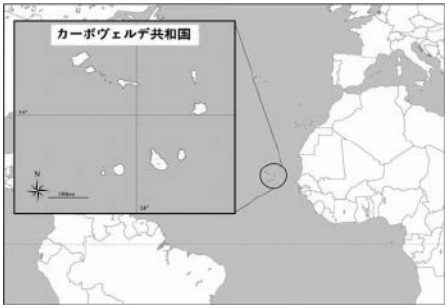


**図１　カーボヴェルデ共和国の位置（筆者作成）**

## 2．多様なクレオールの語義

本章ではまず、クレオールの語源を確認し、主要な旧宗主国言語であるポルトガル語の *crioulo*、スペイン語の *criollo*、フランス語の *créole*、英語の *creole* を分析の対象とし、各言語の辞書および言語学・人類学に関連した事典をつうじてクレオールの語義を明確にする。

### 2.1　クレオールの語源

ポルトガル語の *crioulo* は、ほかのいかなるヨーロッパベースのクレオール（【西】*criollo*,【仏】*créole*,【英】*creole* など）よりも古いというのが通説である。たとえば、1494年にポルトガルとスペインのあいだで結ばれたトリデシリャス条約以前の1460年には、ポルトガル人がすでに西アフリカ島嶼地域であるカーボヴェルデ南部に位置するサンティアゴ島を発見し、入植している[2)]。カーボヴェルデの群島はこの発見以前、無人であったことから、ヨーロッパ人の入植を契機にクレオール化が急速に生じたのである。

しかしながら、実際に確認できるクレオール最古の使用例はスペイン語の *criollo* においてである。それは1564年から1569年までのあいだにペルーの統治者・副王を務めていた García de Castro[3)]が1567年にインディアス枢機会議宛てに記した書簡において確認できる（Andrea V. López 2019: 50; Jacqueline Knörr 2008: 2）。

ポルトガル語の *crioulo* にせよスペイン語の *criollo* にせよ、これらの言語はラテン語を起源とするロマンス諸語であることから文法や語彙が近似しており、そのため *crioulo*/*criollo* の語源ないし本質的な意味は同じである。

「クレオール」とは、動詞 *criar*（育てる・飼育する・栽培するなど）と名詞 *cria*（動物または人間の子ども）に由来しており、これらの語はいずれもラテン語の *creare*（創造するの意）から派生している。そして接尾語の *-oulo*（*crioulo*）や *-ollo*（*criollo*）とは指小辞・縮小辞であることから、

植民地で育った子どもや動植物を示す。それがのちに、子どもだけでなく大人もその対象となり、さらにはアフリカ生まれ／植民地生まれの奴隷を区別する語としてもちいられるようになった。後述するが、たとえば黒人奴隷制時代におけるカーボヴェルデの場合、アフリカ生まれの奴隷をボサーレス（*boçales*）、植民地生まれの奴隷をクレオール[4]と呼ぶように、出自による区別が細分化されていた。

こうした例からもわかるように、各々のクレオール社会によってクレオールの定義が異なり、奴隷制社会ないしプランテーション社会に属する多様な人びと（ヨーロッパ人、アフリカ人、先住民など）を指すための呼称が異なる。これがさらにクレオールの語義を複雑にしている要因であるといえる。つまり、クレオールにかんする微妙なニュアンスの相違は存在するが、これは特定のクレオール社会とその言語文化によって異なるため、一元的に「クレオール社会」として括ることはできない。たとえば、南米ペルーのクレオール社会と西アフリカのギニア・ビサウのクレオール社会はクレオール語の基層となっている言語も違えば、その社会構造も異なるから、同様の「クレオール社会」としてとらえることはできない。

しかしながら、クレオールがもつ普遍的な特徴がないわけではない。次節以降で確認するように、「クレオール」の意味するところは、ラテンアメリカ文化研究の第一人者として知られる Arrom が論文 “Definición y Matices de un Concepto”（1951: 172）のなかで明確に示しているように、「クレオールを特徴づけているのは肌の色素や社会的地位ではなく、ヨーロッパ人であれアフリカ人であれ、非先住民の子孫として新大陸で生まれたこと」にほかならない。むろん、この定義に追記・補足するならば、人間以外に動植物もクレオールであることや、新大陸だけでなくカーボヴェルデのようなアフリカ島嶼国で「育成された存在」もクレオールとして認識されている点である。

## 2.2　ポルトガル語の辞書

「クレオール」は、ポルトガルおよびブラジルにおいて *crioulo* という同語で表現される。ここでは、双方の国における *crioulo* の定義を確認する。まずはブラジルの辞書 *Novo Dicionário da Língua Portuguesa*（de Holanda 1986: 449）をみる。

1．ヨーロッパの旧植民地、とくにアメリカで生まれた白人。
2．1の定義の白人が話す方言。
3．アメリカで生まれた黒人。
4．特定の地域における土着民がもつもの、あるいは関係しているもの（e.g. *Crioulo* のタバコ、*Crioulo* の馬など）。
5．カーボヴェルデ、またはほかのポルトガル領アフリカ諸国で話されるポルトガル語の方言。
6．鶏。
7．異なる複数の言語が単純化し、混淆したことによって形成された土着の言語。また、会話でのみもちいられる言語。
8．一般的に黒人を指す。
9．ブラジルの州で生まれた人。
10．主人の家で生まれた奴隷。
11．藁で作られたタバコ、または巻きタバコ。

ほかのブラジルの辞書（*Dicio* と *Aurélio*）には、上記にはない別の意味がみられる。

（Dicio 2016）[5)]

1．主人の家で生まれた奴隷。
2．ヨーロッパの旧植民地（とくにアンティル諸島）の住民によって話される方言。
3．サトウキビの種類を指す。

(Aurélio 2016)[6)]

1. ブラジル出身の黒人。
2. ある地域に属する人、動物、植物。
3. ヨーロッパ言語と土着言語の接触により生まれた言語であり、ある共同体の人びとの母語となる言語。
4. 多くの変種を含むカーボヴェルデで話されるポルトガル語系ベースの言語。
5. カーボヴェルデの *crioulo* に関係すること。

*Crioulo* が「黒人」を意味することはブラジルのポルトガル語におけるひとつの特徴であり、定義にみられる「主人」、「奴隷」、「旧植民地」などから連想できるように、奴隷制時代の大農園に関係した単語が多くみられる。ブラジルの人種について列挙している *Encyclopedia of Latin American History & Culture* には次のような説明がみられる。

> ブラジルには100以上の人種の呼称があるが、なかでも一般的であったのは、白人（*branco*）、土着の白人（*branco da terra*）＝特定の地域に限ってその肌の白さが認識できる人、モレーノ（*moreno*）＝明るい肌をもつ人、パルド（*pardo*）／ムラート（*mulato*）＝白人と黒人の両親をもつ子供、メスティッソ（*mestiço*）／マメルーコ（*Mameluco*）／カボクロ（*Caboclo*）＝インディオと白人の混血、カフーゾ（*cafuzo*）＝黒人とインディオの混血、クリオウロ（*crioulo*）＝ブラジル出身の黒人、ネグロ（*negro*）／プレット（*prêto*）＝黒い肌をもつ人、あるいはアフリカ出身の黒人、インディゴ（*indigo*）＝インディオ。
>
> (Kinsbruner & Langer 2008: 31)

これはブラジルがいかに人種を詳細に区分していたかを示唆している。ブラジルで *crioulo* はブラジル出身の黒人という意味であるが、以下にみる

ポルトガルの*crioulo*とは異なる意味をもつ。人種を指しているほかに、「サトウキビの種類」（*Dicio* 2016）、「鶏」（*Novo Dicionário da Língua Portuguesa* 1986）といった定義がみられ、ブラジルの食物と産物（タバコや馬）も特徴的だといえる。

また、*Novo Dicionário da Língua Portuguesa*にみられる5と7の意味には矛盾があることを指摘しておく必要がある。5の意味では*crioulo*が「方言」、あるいはポルトガルが支配したかつてのアフリカ諸国で話されていたポルトガル語としてとらえられている一方で、7の意味は土着の「言語」として定義づけられている点である。前者の定義にしたがえば、*crioulo*はポルトガル語の一方言であり、クレオール語として認識していないことに注目すべきである。

次に、ポルトガルの辞書*Dicionário da Língua Portuguesa*（Porto Editora 2011: 445）をみる。

（形容詞）

1．黒人奴隷貿易にかかわった国から生じたもの。
2．植民者と土着民間から発展した接触言語の結果、形成された方言または言語。
3．カーボヴェルデで話される方言。

（名詞）

1．ヨーロッパ人の先祖をもち、ヨーロッパの旧植民地で生まれた人。
2．元来、土着の言語とヨーロッパの言語が接触したことにより生まれた言語をある共同体に属する人びとが母語化したもの。
3．ブラジルで生まれた黒人。

ポルトガルの辞書にみられた*crioulo*の意味は、ブラジルの辞書と同様にポルトガル語方言としてとらえている。たしかにここでは「言語」として定義しているが、形容詞としての3の定義をみると、「カーボヴェルデの方言」（この場合、ポルトガル語の方言として考えるのが論理的）としてい

る。

両辞書にみられる *crioulo* の定義を比較すると、西谷（2001: 104）が指摘しているように、*crioulo* は奴隷制時代および植民地時代に新大陸（辞書では「アメリカ」と表現されている）で生成された産物（新大陸で生まれた白人や黒人）、副産物（新大陸生まれの人びとが話す言語やサトウキビ、不味い鶏のような土着の食物）であることがわかる。

一方で、ポルトガルとブラジルの意味に差異が生じていることが確認できた。すなわち、ブラジルで *crioulo* がアメリカ出身の人、動植物、その地域で話される方言または言語を意味し、植民地時代の名残が色濃く、ポルトガルでも「黒人奴隷貿易」や「植民者」などの単語からも連想されるように、*crioulo* には植民地主義の色濃い影響がみられる。

特記すべきは、*crioulo* が方言なのか言語なのかが非常に曖昧であるが、ポルトガル語の方言のみならず明確に「言語」として認められていることである。一般的にクレオールを方言ではなく、言語としてとらえるようになったのは言語学者の研究成果によるもので、1960年代以降のことである（cf. Arends, Muysken, Smith 1995; Bickerton 1981; Chaudenson 1995; Todd 1974）。

### 2.3　スペイン語の辞書

スペイン語の辞書、*Diccionario de la Lengua Española*（Real Academia Española 2014: 663）には *criollo* にかんして次の7つの定義が挙げられている。

1．アメリカの旧スペイン領、またはアメリカのヨーロッパ旧植民地で生まれたヨーロッパ人の子供、子孫。
2．アフリカから［アメリカへ］[7]連行された黒人とは別に、アメリカの旧スペイン領で生まれた黒人。
3．イスパノアメリカで生まれた人（後略）。
4．土着の人、またはイスパノアメリカ、あるいはその双方を指す。

5．言語としての *criollo* にかんすること。
6．ある特定の言語にもとづいて生成された混淆言語であり、かつての植民地で頻繁に生じた数多くの要素［人や物］。ピジン［語］とは異なり、親から子へと［その言語＝ピジン語が］伝わり、次第にある共同体の言語となるもの。
7．8分の6拍子のリズムをもつキューバ民謡および大衆的なダンス。

ブラジルの辞書でみられた定義同様、大半が植民地主義の文脈において説明されており、イスパノアメリカで誕生した人を指している。興味深いことは、キューバの民謡とダンスのことを *criollo* と呼ぶことであり、ポルトガル語の辞書で確認できなかった植民地生まれの人びとによる芸能産物について記されていることである。

いずれの言語にも共通することは、*crioulo* と *criollo* がそれぞれの旧植民地との関係において創造された産物ということである。また、メキシコ百科事典、*Encyclopedia of Mexico: History, Society and Culture* には *criollos* について次のような内容がみられる。

> *criollos* という単語は、16世紀後半にヌエバエスパーニャ（*Nueva España*）時代に［メキシコの］プエブラ（*Puebla*）でもちいられた。その意味するところは、土着の（アフリカ以外の地域で生まれた）奴隷や家畜を指していた。よって、*criollos* とペニンスラール（*peninsular*）の相違は出生地である。（Werner 1997: 370）

上記の引用文からわかるように、スペイン語特有の表現であるペニンスラールと *criollo* の違いは出生地にあり、新世界（この場合はメキシコ）で生まれたのか、それともスペインで生まれたのかを明確に区分しており、強固な境界線を引いている。続いて、「ヌエバエスパーニャで最初に誕生したヨーロッパ系の人びとは *criollos* ではなく、メスティッソ（*mestizos*）で

あった。（中略）メスティッソはスペイン人男性と先住民女性のあいだに生まれた混血」（Werner 1997: 370）であると説明している。

このように *criollo* に特異な点は、*criollo*、ペニンスラールそしてメスティッソが結びつけられており、ヌエバエスパーニャ時代（1521年～1821年）に創出されたことである。

## 2.4　フランス語の辞書

ここまで検討してきたポルトガル語とスペイン語の辞書にはフランス語の *créole* と同様の意味がみられ、それは「混血」を意味している。したがって、以下ではそれ以外のフランス語特有の *créole* の意味を探ることにする。

フランス語の辞書、*Trésor de la Langue Française*（Imbs 1971: 459）における *créole* の意味は以下のとおりである。

1．ヨーロッパ人の子孫であり、白人を指す。アフリカ生まれでない植民地出身の黒人。
2．*Créole* にかんすること（e.g. 訛り、方言、民謡など）。
3．*Créole* 風の～（何かをアレンジするさま）（e.g. *créole* 風の髪型、*créole* の米＝トマトとピーマンを米と混ぜ合わせたもの）。
4．*Créole*（人）のような気質（無頓着で怠け者、優雅など）。

この辞書の定義には、*créole* が形容詞（方言・民謡・料理・性格など）として表現されており、新世界の副産物を指している。しかし、別の辞書、*Le Grand Robert de la Langue Française* によれば、*créole* とは「熱帯地域間（とりわけアンティル諸島）で生まれた白人と結びつけられる人」、「フランス語、スペイン語、ポルトガル語、英語、オランダ語とアメリカ（アンティル諸島）で根づいたアフリカ諸語が混淆して形成された言語体系」（Robert & Rey 2001: 791）であり、*créole* がつくり上げた産物の意味があれば、これまでに概観してきた言語にみられた植民地とのかかわりも確認

でき、辞書によって *créole* の意味が異なることが理解できる。

最後に、*Dictionnaire Culturel en Langue Française* の定義をみると、「熱帯地域間（とくにアンティル諸島）で生まれた白人。ベケ（*béké*）とも呼ばれる」（Rey & Morvan 2005: 1985）と記されている。この定義には、「ベケ」と呼ばれる人びとと *créole* の人びとは同一であるとしている。マルティニーク島出身の作家、パトリック・シャモワゾーが『クレオールの民話』（1988=1999）の中で「ベケというのは、大きな日傘の下にいる、色の白い入植者のことだ」（シャモワゾー1999: 21）と描写しているように、ベケとはマルティニーク島とグアドループ島に居住する白人のことである。つまり、フランス語には「ベケ」と *créole* というふたつの呼称が存在し、ほかのクレオールの定義にはみられない *créole* 独特の意味がある。

### 2.5　英語の辞書

*Creole* について *Oxford Dictionary of English*（Stevenson 2010: 410）を開くと、次のような定義がみられる。

1．とくにカリブ海地域におけるヨーロッパ人と黒人の混血。
2．中南米に入植したスペイン人またはほかのヨーロッパ人の子孫。
3．ヨーロッパの言語（とくに英語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語）と土着の言語（とくに西インド諸島で奴隷によって話されていたアフリカの言語）が接触することで形成される母語。

*Shorter Oxford English Dictionary*（Stevenson & Brown 2007: 557）にみられる定義も、大方 *Oxford Dictionary of English*（2010）と同様である。ただし、「動植物のこと。西インド諸島で育てられたもので、先住民起源ではなく土着起源のもの、あるいは産物」（Stevenson & Brown 2007: 557）と記されていることは興味深い。このことからもわかるように、しばしば定義にみられる「土着」という語は、先住民を包含せず、植民地で生まれた黒人と白人、あるいはそれらの「混血」を指している。それは、植民地

支配という「暴力」において先住民がほぼ全滅に追いやられたこと、その代替としてアフリカの黒人を奴隷として連行したことによって支配者であるヨーロッパ系の人びととアフリカ系の人びとが混淆した結果、生成された産物であることを示唆している。

## 2.6　言語学にかんする事典

ここからは言語ではなく、言語学と人類学（2.7を参照）にかんする事典からクレオールがどのように説明されているかを確認する。

*International Encyclopedia of Linguistics*（Frawley 2003: 340）には*creole*（語）がピジン語と密接に結びついていることが記されている。そのキーワードとなる用語として「クレオール化」（*creolization*）という概念がみられる（Frawley 2003: 341）。言語学者のHolmが説明しているように、言語学におけるクレオール化の意味は「ピジン語がクレオール語へと変化」（Holm 2000: 7）することである。

最後に、日本語の言語学辞典においてクレオール（語）がどのように説明されているかを確認する。『言語学大辞典』（1989）には「クリオール言語は、各地域の文化的独自性やアイデンティティー意識の象徴となる場合が多いことから、国名や島名を言語名に転用する傾向が強まっている」（亀井ほか1989: 442）と記されている。ここで重要視すべきことは、クレオールをアイデンティティと結びつけていることである。たしかに、「植民地で生まれた白人や黒人」、「民謡・ダンス」「サトウキビの一種」など、アイデンティティを仄めかすような単語が大半であった。しかし、これまでに論じてきた4言語におけるクレオールにおいてはじめて「アイデンティティ」という用語で表現されていたことは強調すべきであろう。

本節でみてきた言語学におけるクレオールにはふたつの特徴が確認できた。第1にアイデンティティと密接に関係した用語であること、第2に言語（e.g. スペイン語とポルトガル語）と地域（e.g. ポルトガルとブラジル）によって狭義の意味を含んでいたことである。言語学者がクレオールを（方

言ではなく）「言語」として認めた事実は、これまでみてきた多くの辞書（ブラジルの辞書には例外的に方言と記されていた）および事典をみれば一目瞭然である。

### 2.7　人類学にかんする事典

『世界民族問題事典』（梅棹1995: 379）には「クレオール」という項目があり、「クレオール」の民族問題は「人種的境界区分」であると指摘している。「クレオール」には「白人クレオール」や「混血クレオール」などの新しいカテゴリーが生まれたことによって、白人と称する「クレオール」が「黒人クレオール」との人種境界が不明瞭になることを問題として明記している。しかし、これはカリブ海地域で生じているクレオールの問題であり、地域性に隔たりがみられることは明白である。

『文化人類学事典』（2009）には「クレオール」が「真正性」という項目のなかで説明されている程度である。なかでも移民とホスト社会への同化／異化を巡っての問題が示されている。すなわち移民が同化あるいは異化するのではなく、「自己の複数性や非一貫性を肯定するクレオールの思想」（日本文化人類学会2009: 235）をもつことが可能だという。また、*Encyclopedia of Cultural Anthropology*（1996）には、「カリビアン」（*Caribbean*）（Levinson & Ember 1996: 171–173）と「植民地主義」（*Colonialism*）（Levinson & Ember 1996: 216）という項目において *Creoles* の語がもちいられており、カリブ海地域における *creole* をイデオロギーとしてとらえていることから、クレオリテ（*créolité*）[8)]の影響が垣間みれる。しかし、カリブ海地域の「クレオール」について概説しているにもかかわらず、*créole* の語がみられない。このような地域性の偏りと語義の問題は、ほかの事典にかんしても同様のことがいえる。

『スペイン・ポルトガルを知る事典』（池上ほか2001: 107）には「クリオーリョ」の項目は存在するものの、ポルトガル（語）の「クリオウロ」の記述は確認できない。『ラテン・アメリカ事典』（ラテン・アメリカ協会

1996: 22–27）には、メスティーソの文脈において「クリオーヨ」という語がもちいられている。対象としているのはスペイン語圏におけるラテンアメリカであり、「植民地に根付くスペイン人がでてきて、やがて植民地生まれのスペイン人が増えてゆく。これがクリオーヨである」（ラテン・アメリカ協会1996: 24）と記されている。

『アフリカを知る事典』（小田ほか2010: 325–328）には、「ピジン諸語・クレオール諸語」という項目でアフリカ言語を列記しており、人類学にかんする説明がない。むろん、人類学者によって記されているとは限らないが（『アフリカを知る事典』は言語学者の西江が担当している）、ここで確認すべきはクレオールについての人類学的説明が認められないことである。

続いて *Encyclopedia of Contemporary Latin American and Caribbean Cultures*（Balderston et al. 2000: 421）で *criollos* の項目を開くと、『ラテン・アメリカ事典』（1996）同様、メスティーソとの関係において「*criollo* はブラジルで黒人を意味する」と記されており、スペイン語の *criollo* とポルトガル語の *crioulo* を混同していることが明白である。

最後に、*Dictionary of Race, Ethnicity and Culture*（Bolaffi et al. 2003: 50–51）を概観する。人種や民族、そして文化に特化した辞書であるにもかかわらず、それはおおむね言語と結びつけられている。

クレオールが論じられる際にみられる地域の偏りとその語義についての問題を探るために、4 言語におけるクレオール、そして言語学、人類学（地域研究）の領域に関連する事典をもちいてその語義の共通性・相違性を整理した。4 言語間で共通していたことは、ヨーロッパの旧植民地（アメリカス、アフリカ諸国）で生成された産物だということである。その産物とは人種、言語、芸能文化を指している。反対に、相違性に着目すると、クレオールと呼ばれる人びとの出生地と人種が言語によって異なっていた。問題として指摘できる、クレオールの語義における地域性の偏りとして頻出するカリブ海地域は、たしかにアメリカスに包含されており、歴史的に密な関係があるイギリスとフランスの辞書には「インド諸島」や「アンテ

ィル諸島」における産物として理解されている。

しかし、アメリカスにはカリブ海地域のほかにも南アメリカ地域が含まれていることから、クレオールの定義について再考することが必要であることを強調したい。ほかにも、ポルトガル語の辞書にのみみられた「アフリカ諸国」、そしてHolm（1989）が示しているアジア地域やインド洋地域におけるクレオールについては記されていない。唯一、『アフリカを知る事典』のなかでクレオール言語について列記されているだけである。

これらのことから、多義的であるクレオールの用法、とりわけその現象には十分に留意しなければならない。ここまでの分析でクレオールの現象を理解するための手がかりがみられた。ここでは、4言語の辞書によるクレオールの語義をみたことで、ふたつの重要な機能の存在を提示したい。

ひとつは形容詞としてもちいられるクレオール、具体的にはほかの文化と区別するための機能（i.e. クレオール人、クレオール語、クレオール料理、クレオール音楽など）をもつ場合である。これは分類としてのクレオールとして理解することができる。それにたいしてもうひとつは、現象としてのクレオールがある。これはクレオールの根本的な意味・現象（柔軟性に富んだ混淆の賜物）であり、名詞であらわされる[9)]。

西谷（2001: 103）が指摘するように、われわれはクレオールという「語を必要とし、それを生みだし継承し、使用した人びとの置かれた状況や、そのなかで生きた人びとの関係」について調査することに価値を置くべきであろう。本研究は、とりわけクレオールの民が生成し、絶えず変貌させるその複合文化を追究するための基盤として位置づけており、クレオール研究にたいする所見である。また、クレオールの語義について理解したことにより、現象としてのクレオールを研究するうえで重要な基盤を築いたといえる。

## 3．文化的クレオール化の概念

クレオールの語義を整理したことで浮き彫りにした「現象としてのクレオール」についてみていくうえで注目すべき鍵概念は、「文化的クレオール化」である。なぜならば、上記でまとめた「現象としてのクレオール＝柔軟性に富んだ混淆の賜物」という機能・定義を、人類学者 Knörr（2008）が「文化的クレオール化」としてすでに概念化しているためである。したがって、ここからは Knörr の用語にしたがい、現象としてのクレオールではなく、概念化されている「文化的クレオール化」という用語を借用する。

さて、クレオール化が生じやすい地理的条件として、たとえば元来無人島であることや、商業目的のために開かれた沿岸部地域であることが挙げられる。カーボヴェルデ南部に位置するサンティアゴ島はこのいずれの条件も整っており、クレオール化が生じるには最適な環境であった。

西アフリカ一帯より大勢の女性奴隷がサンティアゴ島へ連れていかれ、この島を統治していたポルトガル人商人や土地所有者の男性とのあいだに「混血」の子どもが誕生する。この過程はどれだけ遅くとも15世紀後半に起きた出来事であり、この時点でプロト・クレオールのかたちが生成したと考えられるだろう。これを人類学的に正確に裏づけることは困難であるが、15世紀後半にすでにサンティアゴ島でクレオール語が話されていたことを言語学的に明らかにしていることを鑑みれば、少なくとも言語および文化のクレオール化は間違いなくラテンアメリカ諸地域よりもサンティアゴ島のほうが早期に起きたといえる（cf. Quint 2000）。

また、15世紀後半のサンティアゴ島の古都、リベイラ・グランデ（現シダーデ・ヴェーリャ）は熱帯植民地におけるヨーロッパ人最初の入植地であった。さすれば、リベイラ・グランデが最初の安定的なクレオール化（ピジン化ではない）が生じた場所のひとつと考えてよいだろう。

ピジンとクレオールは、言語学において異なる現象として分類されているため、これらふたつの概念を区別することは、文化的事象にかんしてみ

る際にも重要である。このように言語学から着想を得て文化的ピジン化（*cultural pidjinization*）と文化的クレオール化（*cultural creolization*）を区別したのが人類学者のKnörrである。以下、Knörrによる文化的ピジン化と文化的クレオール化の定義を引用する。

> 文化的クレオール化とは、民族的・文化的多様性のなかで、民族を参照しながら新たな共通文化を創造するプロセスとして概念化することができる。（前略）言語学の用語と同様に、文化的ピジン化とは、民族的・文化的多様性のなかで共通の文化とアイデンティティが育まれる過程を指すのだが、クレオール化とは対照的に、民族化をともなわない。それは新たな民族集団が形成されることはなく、当事者たちの生い立ちにもとづく独自のアイデンティティはそのまま維持される。
>
> （Knörr 2008: 13）

つまり、文化的ピジン化の場合は新たに民族化は起きず、元来の文化的アイデンティティをもつ一方で、文化的クレオール化は新たな民族集団として自己を再規定する。さらに文化的クレオール化の特徴について、人類学者のSiebert（2012）が以下のように説明している。

> 以前の民族的アイデンティティはその過程で消滅し、新しい民族的アイデンティティに取って代わられる。こうしたプロセスは、文化的クレオール化をほかの文化的混淆のプロセスと区別するものである[10)]。クレオール化は、創造的な混淆の継続的なプロセスにおいて、民族、国家、文化の境界が解消され、克服されるプロセスとして理解されるのではなく、むしろ、文化やアイデンティティの再文脈化をともなう境界の解消として理解される。　Siebert（2012: 30）

ここで大事なことは、文化的クレオール化には、文化の再文脈化をとも

なうという点である。他者と共同生活を送るうちに、自己がもつ元来の文化が次第に忘れられ、やがて自己と他者が新たな共通する文化を共有していく。

フランスの歌曲を専門とするジャーナリストのDicale（2017）は著書 *Ni noires ni blanches: histoires des musiques créoles* のなかで、文化的クレオール化のプロセスを（1）故郷喪失、（2）接触・出会い、（3）文化変容、（4）自己にたいする憎悪、（5）曖昧な魅力という項目に分けて論じている。

（1）は黒人奴隷が白人によって母国ないし祖国アフリカの地から引き離され、文字どおり「新世界」の地で辛辣な奴隷生活を送った歴史的事実を示している。（2）は「新世界」において先住民や白人、アジア人などと黒人が接触していったことを指している。そして（3）は、こうしたヘテロジニアスな社会において大勢の人びとが連れてこられた混沌とした土着の社会のなかで、各々の文化が混淆し、変容していくさまを示している。

ここまでのプロセスについては、今福（2017）のようなクレオール文化研究者による分析で明らかである。興味深い点は（4）以降に示されている文化的クレオール化のプロセスである。これは新世界へ連れていかれた黒人奴隷のトラウマや心的・精神的な側面に関与している。

たとえば、奴隷個人が受けてきた暴力とそれに付随してつきまとうであろうトラウマはわれわれの創造を絶するが、これを緩和できる方法とは、皮肉にも支配者への服従のなかでしかあり得ない（Dicale 2017: 68）。ここで、もうひとつの重要な指摘がある。すなわち、クレオール社会では、つねに異種混淆の対象となり、複数の世界に属し、最終的には人種的アイデンティティの観点から明確に自己を規定／構築できないことである。よって、クレオール社会はほかの地域にみられるように、自文化の起源を自国に求められる社会では決してないのである（Dicale 2017: 73）。

さて、最後の（5）については、クレオール社会が構築された結果ないし状態を説明するものである。支配者と被支配者が同一の空間で生活を営

んでいくなかで、当然ながら上記した奴隷が服従しなければいけない状況がつくられ、奴隷自身の文化的アイデンティティをないものとしてとらえなおしたことへの同意が求められる。つまり、奴隷の一部が支配的な文化モデルに制約され、流用され、実践せざるを得ないという事実である。一方で「曖昧な魅力」とは、支配者が被支配者の文化をある種「受け入れる」際に作用する。つまり、新たなクレオール社会を構築するために、奴隷側の文化を受け入れ、やがて元々の社会性を排除していくことにある（Dicale 2017: 80）。

ここまで、3人による文化的クレオール化のプロセスについて明確にしたが、いずれもクレオール社会を再文脈化させることで新たな民族的意識を形成しているという点が重要である。

Dicale（2017: 45）はドゥルーズとガタリ（1980=2010）の概念を援用し、上記の文化的クレオール化の特徴について「リゾーム的アイデンティティ」であると言及している。たしかにリゾームの特徴がみられることもあるだろうが、むしろクレオール文化論において重視すべきは、カリブ海・マルチニーク島出身の作家エドゥアール・グリッサンがリゾームの垣根を超えて提唱した＜関係＞（*relation*）である。

グリッサンが著書『関係の詩学』（1990=2012）において提唱した＜関係＞という概念は、異なる文化的背景をもつ人びとが相互に影響するダイナミックな動きであり、開かれた多元的かつ複合的なアイデンティティを構築するうえでの他者とのつながりや文化的交流の重要性を示している。こうした異質の文化を認めて対話していくことで創造性が養われる。そのプロセスにおいてグリッサンが重視しているのが、多元的な文化が出逢って混ざりあう特徴をもつクレオール化であり、このプロセスをとおして新たな芸術様式および表現が生成されていく点、さらにこのプロセスこそが文化の均質化や画一化に対抗する手段であるととらえている点である。

## 4．現代カーボヴェルデ社会における歌謡モルナの今日的価値

ここまで文化的クレオール化について論じてきたが、本章では、カーボヴェルデが誇る伝統的な音楽モルナを事例に、文化的クレオール化の意義および社会文化的役割を検討する。モルナを対象とする根拠は、現在、観光業を主な生業としているカーボヴェルデの国内島民および国外移住者にとってモルナが極めて重要なツールであり、それが日常的な実践であるためである。別言すれば、観光が促進している現代カーボヴェルデ社会においてモルナがどのように観光による影響を受け、クレオール化しているのかについて追究したい。

### 4.1　歌謡モルナを分析対象とする意義

カーボヴェルデ史においてもっとも著名な詩人として知られるEugénio Tavaresの記述から推測できるように、モルナは18世紀半ばから19世紀のあいだに形成され、カーボヴェルデのクレオール音楽史において重要なジャンルのひとつである。

> モルナはボアヴィスタ島で誕生した。のちにほかのカーボヴェルデの島々へと伝播した。（前略）それは約100年間も歌われ続け、われわれの民謡が誇るもっとも美しいものである。ブラヴァ島の最古のモルナは＜ブラダ・マリア＞（*Brada Maria*）である。この歌は突き刺さるような悲痛の叫びを表現している。　（Tavares 1932: 7-10）

上記に「のちにほかのカーボヴェルデの島々へと伝播した」とあるが、モルナはカーボヴェルデの伝統音楽[11)]において唯一、全島で演奏されている音楽であると位置づけられる。この歌謡がカーボヴェルデ音楽史において、いつ、どのような背景でクレオール化したかについて確信を得ることは、当時の音楽の状況にかんする史料が少ないためじつに難しい。そこで

有効的な記録や言説は、現地研究者が実施した聞き取り調査である。カーボヴェルデは本来、口頭伝承を伝統としていたため、こうした島民による語りが極めて貴重な記録となる。

このように、当時の音楽状況について聞き取り調査を実施して詳細にカーボヴェルデ音楽を包括的に記述しているのが、*Kab Verd Band*（2006）の著者であり、カーボヴェルデの音楽史に詳しいジャーナリスト、Carlos Filipe Gonçalves である。

こうした19世紀末や20世紀初頭に収集したような聞き取り調査の記述をとおして、筆者はモルナがどのような歴史社会的背景のなかでクレオール化していったのかについて、拙著「カーボヴェルデのなかのアフリカ：文化的抵抗としての舞踏バトゥクから歌謡モルナへ」（2018）で論じた。ここで詳細に説明はしないが、導きだされた一部の結論としてつぎのことを指摘したことは再確認しておきたい。

カーボヴェルデ最古の音楽で南部地域を代表する音楽文化バトゥクが、15～16世紀以来、ポルトガル・カトリック教会によって禁止されたことでクレオール化せざるを得ない状況にあった。そこで島民はバトゥクが表象していた「アフリカ性」の音楽をクレオール化させ、新たに生成されたモルナに「クレオール性」という要素を付随させた[12)]。

その後、奴隷制時代にクレオール化のプロセスを経たことで生成したモルナが、20世紀末になると、カーボヴェルデを代表する歌手Cesária Évora の国際的な活躍により、モルナはもちろん、カーボヴェルデの存在自体が世界的に認められるようになった。これにより、カーボヴェルデは「秘境の地」や「小国」というレッテルを剥がすことに成功した。そして21世紀には、モルナがユネスコ無形文化遺産に登録されるに至ったのである。こうした流れを汲みとると、モルナの今日的価値を分析する意義がいかに重要かが理解できる。

### 4.2　モルナ推進のための政策と活動内容

2019年、モルナがユネスコ無形文化遺産に登録されたことはまだ記憶に新しい。その後、4年ほどの月日が経ったいま、モルナはどのような立ち位置にあるのか。まず、現状把握のために、ユネスコ無形・有形文化遺産とカーボヴェルデの文化遺産研究所の目的を確認しておく。

> 持続可能な開発と社会的一体性の達成を支援するために、有形、無形の遺産を発展させること、平和の文化を育成するために、多様な文化の表現や異文化間の対話を保護、促進すること、紛争後もしくは自然災害後の国における和解と復興のために文化的要素を取り入れること。[13)]

つぎに、モルナの保護・発展のためにカーボヴェルデ国内で実際にどのような取り組みがなされているかをみる。カーボヴェルデの首都プライアに設立されている文化遺産研究所（Instituto do Património Cultural, IPC）の公式サイトを閲覧すると、2023年12月時点の活動報告についてつぎのように取り上げられている。「モルナの保護、保存、評価、発展のプロセスにおいてコミュニティ[14)]が主要な役割を果たしている」[15)]。具体的には、文化研究・遺産研究所（Instituto da Investigação e do Património Culturais, IIPC）の所長を務めているHumberto Limaは中学生を対象に実施された講演で、島民の文化的アイデンティティにおけるモルナの役割および世界遺産としての価値について語っている。これは“MorNa Kumunidadi”（モルナ・コミュニティ）というプロジェクトの一環であり、その目的は「文化遺産教育を促進するだけでなく、モルナ無形文化遺産保護計画にしたがって、さまざまな世代に無形文化遺産［モルナを］継承すること」[16)]と明記されている。

さて、いずれもモルナを保護・継承していくことを重視していることがわかる。そのために、文化遺産研究所がモルナにかんするワークショップ

や講演会を実施していることは間違いなく重要である。さらに肝要なことが2023年12月のカーボヴェルデの新聞*Expresso das Ilhas*誌において指摘されている。

文化遺産研究所所長のCarla Semedo氏によると、本研究所は2024年に、文化的象徴であるモルナを継承することを目的としたパンフレットを発行する予定である。すなわち、「移住、サウダーデ[17]、愛のように、カーボヴェルデ人のライフサイクルを貫くテーマに関連するさまざまなモルナの歌を収集・調査すること」である[18]。

このプロジェクトはモルナを保護し、継承していくうえでじつに有効な方法である。とりわけ重視すべき点は、「国民的歌謡」とも比喩されるモルナの歌詞において表現されているカーボヴェルデ人を定義づける要素（移住・ソダーデ・愛）に価値を置いていることである。筆者によるこれまでのモルナ研究にしたがえば、これらの要素（移住・ソダーデ・愛）に島民独自のホスピタリティの精神であるモラベーザ（*morabeza*）を付け加えるべきである。というのも、これらの要素はすべてモルナの歌詞中に頻出し、カーボヴェルデ史において重要な価値を有しているためである。より正確にいえば、これらの概念は、精神的にも文化的にも、国内の島民と国外に居住するカーボヴェルデ人移民が共有できる要素なのだ。

しかし、筆者が断続的に実施した現地調査[19]では、上記で引用した記事の内容のような現状があったとは言い難い。むろん、新型コロナウィルス感染症（以下、コロナ）が流行しだした2019年12月から2022年までは文化遺産の保護にかんする活動をしているような状況ではなかったであろう。実際、モルナが無形文化遺産に登録されたのはコロナの流行とほとんど同時期である。むしろ、2023年８月に実施した聞き取り調査によれば、コロナ禍に外界から閉ざされたカーボヴェルデの島々に配給された食料が不足しており、政府による資金援助や物資支援が全国民に行き届かなったと嘆く島民がじつに多かった。

### 4.3　現代におけるモルナの実態と問題

本節では、これまで筆者が分析の対象としてきたモルナの実態について整理し、現場で起きている問題を明確にする。

2013年におこなった6ヶ月にわたるカーボヴェルデ北西部に位置するサンヴィセンテ島、サントアンタゥン島、サンニコラウ島における現地調査では、自宅の前や近所のキオスク、酒場でモルナが歌われることが多く、レストランやホテルでは正式にライブ形式（報酬はレストラン経営者がミュージシャンに支払う）で演奏されてきた。その際に分析したモルナの実態とは、モルナの演奏の空間や場というよりも、モルナそのものが変化していたことであった。すなわち、モルナ史におけるB. Léza時代（1930年～1950年）[20]に演奏されていた伝統的なモルナだけではなく、ジャズの音楽要素を混淆させたモルナ・ジャズが確立され、フュージョンさせていくような新たなモルナの様式を確認することができた。

2019年、モルナが無形文化遺産に登録され、カーボヴェルデ政府はモルナの保存、発展、発信という使命と責任を負うこととなった。2019年8月までは大勢のミュージシャンがこれまでのように酒場やレストランでモルナを演奏し、余暇で歌うものも見受けられ、例年どおり生演奏や音楽イベント[21]が開催された。しかし、店舗側とミュージシャンのあいだにはすでに軋轢が生じていた。その要因は少なくともふたつ考えられる。すなわち、演奏の場が減少していることと、ミュージシャンへの報酬が不足している点である。

コロナ収束後、これまでと同じように外国人観光客がカーボヴェルデを訪れた影響もあり、観光客や現地住民が夜半に集うミュージシャンにとって重要な演奏場であったラジーニャ・ビーチ沿いに立ち並ぶレストランや酒場[22]が次々と閉店し、代わりに駐車場やホテルが建設され始めている。おそらく新しく建設されているこれらのホテルでふたたび演奏の場が設けられるだろう。しかし、ここで問題視していることは、上記した飲食店が単に食事をするための「レストラン」ではなく、伝統的な歌を演奏できる

重要な空間であり、その多くが極端に失われたことである。むろん、新たな飲食店も開店しているが、以前のような演奏の場として活用されるに至っていない。さらに、これに携われる島民が経済的に裕福な人に限定されるという問題も残る。

もうひとつの要因は、ミュージシャンにたいして報酬が支払われないことにある。プロであれアマチュアであれ、多くのミュージシャンが一晩で5曲ほど演奏すれば、ひとりあたり日本円で2、3千円は支払われるはずが、実際にはその半分ほどの報酬しか手にできないのである[23)]。この問題は現在、さらに深刻化しているといえるだろう。

ほかにも事例がある。飲食店の店主がライブ演奏後に音楽家[24)]にたいして支払わない理由はモルナが演奏される場が少ないためである。ミュージシャンは1時間程度で2、3千円を受け取るから、おそらく平均的に一晩で4、5千円は店主から支払わていると予想できる。しかし、店主側が音楽演奏に価値を見出さないのであれば、ミュージシャンたちは演奏する場を失い、徐々に島民は近所の広場や自宅前の小道で演奏をしなくなる。

つまり、双方のあいだに曖昧な「契約」が取り交わされており、ミュージシャンを招待する店主側による無責任な行動が問題視される。そして結果的にミュージシャン側は約束の報酬を得られないがゆえに演奏を放棄する。

一方で、世界を混乱に陥れたコロナが収束へと向かった2023年に、筆者がサンヴィセンテ島でおこなった聞き取り調査から、モルナの形態がさらなる変容を遂げていることが明らかとなった。聞き取り調査をおこなったひとりにDukas氏という50代前半の男性がいる。彼はモルナの演奏には欠かせないギターのレッスンを開講し、そこで全体で10人ほどの生徒（初級・中級・上級）にたいして主にギターの弾き方を教えている。モルナの保存と継承に貢献している点において彼の活動は極めて重要であるが、Dukas氏個人による活動だけでは状況が変わるとは考えにくい。Dukas氏いわく、カーボヴェルデ政府は音楽のために資金援助をしておらず、「無形

文化遺産」という称号を与えられたモルナを支え、紡いでいく人びとが減少している。これは確実にいえることではないが、大勢の島民がDukas氏と同様の発言をしており、現状を鑑みればここに原因があることは想像に難くない[25)]。

これについて政府側は正式にどのような表明をしているのだろうか。「政府計画と信任決議案2021年～2026年」（*Programa de Governo e Moção de Confiança 2021-26*）を確認すると、以下の文言がみられる。

> 文化・クリエイティブ産業部門への公共投資を増やし、同部門の活動のための具体的な資金、税制、訓練、技術支援の枠組みをつくり、返済不要の投資と信用を組み合わせる。[26)]

つまり、ここに明記されている内容が早急に実現されれば、当事者たちの状況は改善される可能性があり、Dukas氏のように、善意で音楽レッスンを開講している者が救われるかもしれない。

ただし、全島民が悲観しているわけではない。モルナの演奏される場が減少したからとはいえ、それが失われたわけではけっしてない。筆者による2023年8月の調査では、飲食店ボンゴスト（*Bom Gosto*）でモルナを2～3時間歌う20代の若者を確認している。

彼は10代の頃、5、60代のミュージシャンのグループからギターを教えてもらい、日常生活において身近であったモルナに夢中になり、いまではYouTubeでギターや歌を独学で練習している。大人が子どもにモルナを教えるのがカーボヴェルデ人の伝統的な音楽の習得方法である。広場や公園、自宅前の路上に集まり、モルナを楽しむ。そこへ興味をもった若者が混じり、おのずとギターや歌い方、その精神性を学ぶのである。

しかし、これは一例に過ぎない。モルナの継承問題や演奏場問題、さらにはミュージシャンへの報酬などのように、劣悪な音楽環境にあることに目を背けず、現在のモルナが窮地に陥っていることに警鐘を鳴らす必要が

あるだろう。

では、このままモルナの価値は観光の促進とともに失われていくのだろうか。注目すべきは、カーボヴェルデの社会経済状況においてモルナをもちいたカウンターの動きが生じるかどうかである。文化が動態的であるならば、文化的なカウンターが起こることがある種の処世術となり、これは文化を継承するための「法則」ともなりうる。つまり、鍵となるのが文化的なカウンター、すなわちモルナの文化的クレオール化の作用である。これについては最終章で考察する。

## 5．考察と結論

本研究は、クレオールの語源とその多義性を再確認し、文化がどのようにクレオール化していくのか、そのプロセスについて分析した。

地域社会によってクレオールの語義が異なるため、じつに混乱を招きやすい複雑な概念であるが、重要なことはその多義性を認め、一元的なクレオール的思考をもたないことである。というのも、国内外問わず、クレオールにかんする多数の文献には、その大枠の語義や位置づけが恣意的である場合が少なくなく、多義的・多元的なクレオールの現象を安易にもちいている場合があるためである。つまり、「混淆さえしていればいかなるものもクレオール」という視点でもなければ、類似概念である宗教的なシンクレティズムや政治的なハイブリディティの意味とも異なる。文化的クレオール化は、Siebert（2012）が言及しているように、再民族化ないし文化やアイデンティティの再文脈化をともなう境界の解消である。

また、ことさら重要なのが、言語だけでなく文化的現象としてのクレオール化が植民地主義やポストコロニアリズムの背景において位置づけられており、生成された多元的な現象を包含するものの、上記したように、限定的な意味を有することである。

また、クレオールの多義性を確認したことで導かれた現象・分類として

のクレオールは、クレオール諸地域・社会を比較するうえで有効な指標となるだろう。本研究ではこれを応用し、カーボヴェルデ社会における「現象としてのクレオール」ないし文化的クレオール化としての歌謡モルナの今日的価値を検討した。すなわち、黒人奴隷貿易と植民地主義の背景においてクレオール化したモルナがユネスコ無形文化遺産に登録されたため、この歌謡が現在、どのような立ち位置にあるのかを明らかにした。

モルナは単なる「クレオール文化」や「クレオール語」のようなクレオールの副次的なものではなく、カーボヴェルデ人による「クレオール」な生き様である。では、その生き様とはなにか。

安部工房と養老孟司の対談「コトバはヒトを滅ぼすか」のなかで安部がクレオールが発生する条件には伝統をもたないこと、または伝統から追放されたという意識をもつことが必要であると言及している[27)]。もしかしたら、カーボヴェルデ人の生き様のひとつに安部がいうところのクレオール回帰が露呈されるかもしれない。つまり、連続的な混淆のプロセスを経て新たな境界をつくりなおすという生き様である。それはクレオール文化が一定の段階に到達すると、停滞し、やがて異質の存在へと規定しなおされる。また、歴史が連続的で有機的なのであれば、規定しなおされたのちに、ふたたびクレオールに立ち戻る。そのとき、新たな風景としてのクレオールが待ち構えている。

では、現在のカーボヴェルデのクレオール文化（とりわけモルナに注目した場合）は停滞するのか、継承するのか、それとも回帰していくのか。結論を先取りするならば、クレオール文化は停滞・回帰・再生をするのではなく、編みなおされるのである。レヴィ＝ストロースのことばを借りるならばブリコラージュの思想である[28)]。

すでに述べたように、クレオールは植民地的なニュアンスがいまだつきまとう。しかし、その「植民地的遺産」とは、まさにユネスコがそうしているように、現在では「文化遺産」として利用されているポリティカルな立ち位置にもある。カーボヴェルデの島民は無意識のうちにみずからの音

楽的アイデンティティを「失いつつある」ことに気づかなければならない。あるいは、現地アーティストや研究者を筆頭に、モルナを壊し、つくりなおしていく必要があるのではなかろうか。

それではどのように「壊す」ことができるだろうか。その鍵となるのがディアスポラの現象である。それは世界的に著名な移民研究者、Robin Cohen による長年のクレオール・ディアスポラ研究が示唆している[29)]。カーボヴェルデやほかのクレオール諸地域にあてはまるように、クレオールの人びとは母国・祖国を離れ、国外移住している。

カーボヴェルデにかんしていえば、国民の 2 倍以上ものカーボヴェルデ人が国外に居住している[30)]。カーボヴェルデ人移民と国内島民によるつながりに目を向けることで、恒常的な文化的相互影響の現象が生じる。つまり、国内外の「カーボヴェルデ人」同士による多様な文化的交流が、これまでのように促進し続けられるならば、そこには際限なく新たな境界が再構築される。こうしてカーボヴェルデ世界におけるクレオール文化が壊され、つくりなおされるプロセスを可能とする。これこそが、ひとつの文化的クレオール化のかたちなのではないだろうか。このことを現段階で普遍化はできないが、少なくともカーボヴェルデにおけるクレオール性（*crioulidade*）[31)]の特徴ということができる。

では、肝心の国内外の「カーボヴェルデ人」同士をつなげているクレオール性はなにか。それが離郷主義（*terra-longismo*）[32)]の思想なのだ。しかし、それはけっして国内と国外という二元論的次元でとらえているわけではない。なぜならば、国外移民の立ち位置や彼らが影響を受けるホスト社会側の人びとの文化的アイデンティティは、移住先の社会構造によって異なるためである。もうひとつの根拠は、カーボヴェルデ国内に存在する 9 島の有人島が異なる歴史、社会、文化を構築しながら、相互につながりをもちつづけているからである。

このことをリゾーム的と考えるよりは、むしろ循環的にとらえるグリッサンの＜関係＞の思想と大いに合致する。しかし、この離郷主義的思想は

垂直的・平行的なつながりのみならず、国内島民と国外移民に加え、国内の島間による多層的な関係性を示している。そのため、その循環的かつ流動的な存在自体を線や点ではなく、立体的な「面」ないし奥行きの側面を包含する「地平」（性）としてとらえなおしたい。それは有限的空間のなかで止まることなく循環し、まるで目的をもたない風や水のような有機的流動性を特徴とする。このようにクレオール文化の構造を再考する場合、安部が指摘するようなクレオールの回帰やクレオールの停滞として認識するのではなく、グリッサンやCohenから誘発される、「クレオール性」の有機的かつ地平的な構造を提示することができよう。

では、この思想を、カーボヴェルデの国民的歌謡の位置を確立したモルナに照合してみる。

モルナは、カーボヴェルデの無形文化遺産として重要な存在であることは間違いない。しかし、時代とともに変化していくモルナの様式については慎重に検討する必要があろう。

モルナを継承していくためには、伝統的な様式を維持するだけでなく、新しい要素を取り入れながら発展させていくことが必要である。重要なことは、モルナの核となる精神性、メッセージ性（郷愁のソダーデ・ホスピタリティのモラベーザ・愛・移住）を残しつつ、現代社会に合うように、リズムやメロディーなどの音楽的な表現方法を変容させていくことである。

また、カーボヴェルデ政府の今後の課題として指摘できるのが、モルナの歴史的価値、文化的意義を教育の場で広く伝え、後世に確実に継承できる体制づくりを推進していくことである。この場合、4章で取り上げたミュージシャンによる酒場での演奏問題を解決するためにも、とりわけ当事者であるミュージシャンやアーティストを対象に政府や関連団体が支援し続け、地域コミュニティを活性化させるほかないだろう。

喫緊の課題は、政府、島民、国内外のアーティストと研究者が互いに共鳴し、現代モルナを編みなおすことである。さすれば近い将来、新たな無形文化遺産モルナの価値づけが可能となるだろう。

## 注

1） 日本では1970年代にピジン・クレオール（語）研究が盛んになる。言語学におけるピジン・クレオール語研究史にかんする文献は枚挙にいとまがないが、ここではピジン・クレオール語の研究史については記さないため、参考となるものについて以下に一部のみ記載しておく。
cf. 月刊『言語』特集・ピジンとクレオール：民族が出会うと言葉が生まれる、14巻11号、1985年；林正寛「ピジン・クレオール研究略史」『一橋論叢』98巻1号、97–114頁、1987年；John Holm. *An introduction to pidgins and creoles*, Cambridge University Press, 2000; Loreto Todd. *Pidgins and Creoles*, Routledge and Kegam Paul, 1974.

2） アズララ・カダモスト（1967年）。

3） Lope García de Castro（1516年～1576年）。

4） クレオールの語義が多様なのは、植民地時代における複雑な社会歴史的背景や構造が唯一の要因ではない。それは植民地時代における多様な人種や民族の人びとを区別したためであり、したがってクレオールに類似する語が極めて多いことが挙げられる。たとえば、黒人奴隷制時代におけるカーボヴェルデ社会には、支配者層に属する白人男性ランサードス（*Lançados*）の妻＝黒人女性であるタンゴマス（*Tangomas*）、彼らの子ども（*Filhos da Terra*）などが存在する。ほかにも、本論で説明しているように、アフリカ大陸からカーボヴェルデに連れてこられた黒人奴隷のボサーレスがカトリックに改宗し、ラテン語やポルトガル語を学ばされるとラディーノス（*Ladinos*）と呼ばれる。詳細は青木（2017：67）。

5） Aurélio, “Dicionário Aurélio” 2016. https://dicionariodoaurelio.com/crioulo（アクセス日：2016年11月2日）

6） Dicio, “Dicionário Online de Português” 2016. https://www.dicio.com.br/crioulo/（アクセス日：2024年5月10日）

7） 引用中の［　］はすべて筆者による補足である。

8） クレオリテまたはクレオール性とは、マルチニーク島出身の作家・言語学者であるBernabé、Chamoiseau、Confiantによって提唱された概念である（Bernabé, Chamoiseau, Confiant 1993）。

9） これらふたつのクレオールについては、すでに青木（2017）で論じているが、本稿ではクレオール化の問題を扱っている点において異なっており、さらに論を発展させているため、ふたたび取り上げている次第である。

10） 区別すべき類似概念にトランスナショナリズム（*transnationalism*）、シンクレティズム（*syncretism*）、ハイブリディティ（*hybridity*）などが挙げられる。

11） ここで「伝統音楽」が指していることは、カーボヴェルデで流行しているズーク（*zouk*）やヒップホップ、レゲェなどの海外から影響を受けた「ポップス」ではなく、

カーボヴェルデでクレオールの人びとが形成した音楽文化（ほかにもカーボヴェルデ最古の音楽であるバトゥク（*batuku*）、南部の島々で20世紀から演奏されるフナナ（*funaná*）、そしてモルナから発展したコラデイラ（*coladera*）などがある）である。

12） 詳細は、青木（2018年）を参照。

13） 国際連合広報センター「文化と発展」: https://tinyurl.com/5n84wxbs（アクセス日：2024年5月10日）。

14） これは“MorNa Kumunidadi”（モルナ・コミュニティ）のプロジェクトを指している。

15） IPC, 2023/12/5. “Morna, Património Imaterial da Humanidade no centro da conversa na Escola Secundária de Salineiro”. https://ipc.cv/fr/noticias/morna-patrimonio-imaterial-da-humanidade-no-centro-da-conversa-na-escola-secundaria-de-salineiro/（アクセス日：2024年5月10日）

16） 同上。

17） 記事はポルトガル語であるから、ここではサウダーデ（*saudade*）と記されているが、カーボヴェルデのクレオール語ではソダーデ（*sodade*）とあらわすことから、筆者はこれを同一の概念としてみていない。したがってここでは一貫してソダーデ（*sodade*）と示す。双方にみられる概念の相違については青木（2017: 123–127）を参照。

18） Expresso das Ilhas, “IPC realiza actividades no âmbito do Plano de Salvaguarda da Morna” nº 1149 de 6 de Dezembro de 2023. https://expressodasilhas.cv/cultura/2023/12/11/ipc-realiza-actividades-no-ambito-do-plano-de-salvaguarda-da-morna/89028（アクセス日：2024年5月10日）

19） 調査は、2018年、2019年、2023年の8月から9月のあいだにサンヴィセンテ島で実施した。ただし、サンヴィセンテ島以外の島民の現状については不確かであることは注意したい。

20） B. Léza（本名Francisco Xavier da Cruz、1905年～1958年）は、カーボヴェルデ音楽史における重要な作曲家である。

21） たとえば、ジャズ・フェスティバルや国内でもっとも規模が大きい音楽フェスティバル、バイーア・ダス・ガタス（*Baía das Gatas*）などがある。

22） たとえば「オランダ酒場」（*Bar Holanda*）や「モルナハウス」（*Casa da Morna*）などの生演奏で有名な飲食店などがある。

23） 正規に支払われるのは高級レストラン・ホテルで演奏された場合に限られる。

24） 音楽だけを生業にしておらず、多くは趣味や副職的な意味で仕事終わりに演奏する。

25） 聞き取り調査は、Dukas氏が借りていたギターレッスン場で2023年9月6日に実施した。

26） “Programa de Governo e Moção de Confiança 2021-26, 2021”: https://www.governo.cv/documentos/programa-do-viii-governo-constitucional-da-ii-republica/（アクセス日：2024年5月10日）
27）「安倍工房／養老孟司対談」: https://www.youtube.com/watch?v=kDleRMz9rHw（アクセス日：2024年5月10日）
28） レヴィ＝ストロース『野生の思考』、1987年。
29） Cohen & Toninato（2010）を参照。
30） 詳細はLesourd（1995）とLuís Batalha & Jørgen Carling（2008）を参照。
31） Bernabé, Chamoiseau, Confiant（1993）が提唱するクレオリテ（*créolité*）とは多少異なる文脈でもちいられている。というのも、カーボヴェルデは地理的には西アフリカに位置しているが、ヨーロッパ・アメリカス・アフリカのあいだに位置する島嶼地域であるがゆえに、島民はみずからを「カーボヴェルデのクレオール」または「クレオール」と規定してきた。しかし、カーボヴェルデのクレオール性（*crioulidade*）についての議論は、精神的な再アフリカ化を企図するような単一的な言説と中間的な位置にある「クレオール」の複合的な文化的言説を問題としている（cf. Duarte 1999; Brito-Semedo 2023）。
32） あえて邦訳するならば「離郷主義」となるが、これはカーボヴェルデ・ディアスポラに特有の概念であることに注意したい（cf. Martins 2018）。すなわち、干ばつや水不足、乏しい資源、ほかにも飢饉や噴火などの自然災害による「貧困」から逃れるために、カーボヴェルデ国内人口よりも遥かに上回るカーボヴェルデ移民が存在するという現状を理解するための概念である。本論で取り上げている歌謡モルナの歌詞にはこのような「カーボヴェルデ性」（*caboverdianidade*）のテーマが多く描かれている。

## 参考文献

【著書・論文】（和書）
・青木敬（2017）『カーボ・ヴェルデのクレオール―歌謡モルナの変遷とクレオール・アイデンティティの形成―』松香堂書店。
・青木敬（2018）「カーボヴェルデのなかのアフリカ：文化的抵抗としての舞踏バトゥクから歌謡モルナへ」『アメリカス研究』23号、205-213頁。
・今福龍太（2017）『クレオール主義』パルティータ1、水声社。
・アズララ・カダモスト（1967）『西アフリカ航海の記録』大航海時代叢書II、岩波書店。
・エドゥアール・グリッサン（2012）（管啓次郎訳）『＜関係＞の詩学』インスクリプト（初版第2刷）。
・クロード・レヴィ＝ストロース（1987）（大橋保夫訳）『野生の思考』みすず書房。
・月刊『言語』特集（1985）「ピジンとクレオール：民族が出会うと言葉が生まれる」

14巻11号。
・ジル・ドゥルーズ／フェリックス・ガタリ（2010）（宇野邦一訳）『千のプラトー 資本主義と分裂症（上）』河出文庫。
・パトリック・シャモワゾー（1999）（吉田加南子訳）『クレオールの民話』青土社。
・西谷修（2001）「＜クレオール＞の多義性」『総合文化研究』4号、98-108頁。
・林正寛（1987）「ピジン・クレオール研究略史」『一橋論叢』98巻1号、97-114頁。

【著書・論文】（洋書）
・Andrea V. López (2019). “Futuras glorias annuncia, tàm beneficas, quàm claras»1: profecía y esperanza criolla en el poema Hispano-Latino (1687) de Rodrigo de Valdés”. *Mercurio Peruano*, Vol. 532, pp. 49-60.
・Bertrand Dicale (2017). *Ni noires ni blanches: histoire des musiques créoles*. Paris: Anthropologie musicale Cité de la musique - Philarmonie de Paris.
・Carlos Filipe Gonçalves (2006). *Kab Verd Band*. Praia: Instituto do Arquivo Histórico Nacional.
・Dereck Bickerton (1981). *Roots of Language*. Ann Arbor: Karoma Publishers.
・Eugénio Tavares (1932). *Mornas Cantigas Crioulas*. Lisboa: Rodrigues, J. & Cia Editores.
・Gerhard Seibert (2012). “Creolization and Creole Communities in the Portuguese Atlantic: São Tomé, Cape Verde, the Rivers of Guinea and Central Africa in Comparison” , in Toby Green (ed.), *Brokers of Change: Atlantic Commerce and Cultures in Pre-Colonial Western Africa*. Oxford: Proceedings of the British Academy by Oxford University Press.
・Jacqueline Knörr (2008). “Towards Conceptualizing Creolization and Creoleness”. *Max Planck Institute for Social Anthropology Working Papers*, Working Paper No. 100.
・Jacques Arends, Pieter Muysken, Norval Smith (1995). *Pidgins and Creoles: An introduction*. Amsterdam: John Benjamins.
・Jean Bernabé, Patrick Chamoiseau, Raphaël Confiant (1993). *Éloge de la Créolité*. Paris: Gallimard.
・John Holm (2000). *An introduction to pidgins and creoles*. Cambridge: Cambridge University Press.
・John Holm (1989). *Pidgins and Creoles Vol. II*. Cambridge: Cambridge University Press.
・José Juan Arrom (1951). “Criollo: Definición y Matices de un Concepto”, *Hispania*, Vol. 34, No. 2, pp. 172-176.

・Loreto Todd（1974）. *Pidgins and Creoles*. London & Boston: Routledge and Kegam Paul.
・Luís Batalha & Jørgen Carling（2008）. *Transnational Archipelago: Perspectives on Cape Verdean Migration and Diaspora*. Amsterdam: Amsterdam University Press.
・Manuel Brito-Semedo（2023）. *Cabo Verde: Ilhas Crioulas – Da Cidade Porto ao Porto – Cidade*. Lisboa: Rosa de Porcelena Editora.
・Manuel Duarte（1999）. *Caboverdianidade e Africanidade e Outros Textos*. Praia: Spleen.
・Michel Lesourd（1995）. *État et société aux îles du Cap-Vert*. Paris: Karthala.
・Nicolas Quint（2000）. *Le Cap Verdien: origines et devenir d'une langue métisse*. Paris: L' Harmattan.
・Robert Chaudenson（1995）. *Les Créoles*. Que sais-je. Paris: Presses Universitaires de France.
・Robin Cohen & Paola Toninato（2010）. *The Creolization Reader Studies in Mixed Identities and Cultures*. London: Routledge.
・Vasco Martins（2018）. *Cabo Verde Ressonâncias –Volume 1– A Morna, Estudos Adjutórios*. Praia: Livraria Pedro Cardoso.

【辞書・事典】（和書）
・池上岑夫、牛島信明、神吉敬三、金七紀夫（2001）『スペイン・ポルトガルを知る事典』平凡社。
・梅棹忠夫（1995）『世界民族問題事典』平凡社。
・小田英朗、川田順造、伊谷純一郎、田中二郎、米山俊直（2010）『アフリカを知る事典』平凡社。
・亀井孝、河野六郎、千野栄一（1989）『言語学大辞典　世界言語編（上）』1巻、三省堂。
・日本文化人類学会（2009）『文化人類学事典』丸善株式会社。
・ラテン・アメリカ協会（1996）『ラテン・アメリカ事典』ラテン・アメリカ協会。

【辞書・事典】（洋書）
・Alain Rey & Danièle Morvan（2005）. *Dictionnaire Culturel en Langue Française Vol. 2*. Paris: Dictionnaires Le Robert.
・ Angus Stevenson（2010）. *Oxford Dictionary of English*. 3rd edition. New York: Oxford University Press.
・Angus Stevenson & Lesley Brown（2007）. *Shorter Oxford English Dictionary Vol. 1*. Oxford: Oxford University Press.

・Aurélio Buarque de Holanda（1986）. *Novo Dicionário de Língua Portuguesa.* 2nd edition. Rio de Janeiro: Editoria Nova Fronteira.
・Daniel Balderston, Mike Gonzalez, Ana M. López（2000）. *Encyclopedia of Contemporary Latin American and Caribbean Cultures Vol. 1.* London: Routledge.
・David Levinson & Melvin Ember（1996）. *Encyclopedia of Cultural Anthropology Vol. 1.* New York: Henry Holt and Company.
・Guido Bolaffi, Raffaele Bracalenti, Peter Braham, Sandro Gindro（2003）. *Dictionary of Race, Ethnicity and Culture.* London: SAGE Publicatoin.
・Jay Kinsbruner & Erick D. Langer（2008）. *Encyclopedia of Latin American History and Culture Vol. 1,* 2nd edition. Detroit: Charles Scribner's Sons.
・Michael S. Werner（1997）. *Encyclopedia of Mexico: History, Society and Culture.* Chicago: Fitzroy Dearborn Publishers.
・Paul Imbs（1971）. *Trésor de la Langue Française: dictionnaire de la langue du XIXe et du XXe Siècle (1789–1960).* Paris: Éditions du Centre National de la Recherche Scientifique.
・Paul Robert & Alain Rey（2001）. *Le Grand Robert de la Langue Française Vol. 2.* Paris: Dictionnaires Le Robert.
・Porto Editora（2011）. *Dicionário da Língua Portuguesa.* Porto: Porto Editora.
・Real Academia Española（2014）. *Diccionario de la Lengua Española.* Madrid: Real Academia Española.
・William J. Frawley（2003）. *International Encyclopedia of Linguistics Vol. 3,* 2nd edition. Oxford: Oxford University Press.

【インターネットサイト】
・安倍工房／養老孟司対談「安倍工房『文明のキーワード』Vol. 2」（https://www.youtube.com/watch?v=kDleRMz9rHw）
・国際連合広報センター「文化と発展」（https://tinyurl.com/5n84wxbs）
・Aurélio, "Dicionário Aurélio" 2016.（https://dicionariodoaurelio.com/crioulo）
・Dicio, "Dicionário Online de Português" 2016.（https://www.dicio.com.br/crioulo/）
・Expresso das Ilhas, nº 1149 de 6 de Dezembro de 2023.（https://expressodasilhas.cv/cultura/2023/12/11/ipc-realiza-actividades-no-ambito-do-plano-de-salvaguarda-da-morna/89028）
・Programa de Governo e Moção de Confiança 2021–2026.（https://www.governo.cv/documentos/programa-do-viii-governo-constitucional-da-ii-republica/）
・IPC, "Morna, Património Imaterial da Humanidade no centro da conversa na Escola Secundária de Salineiro". 2023/12/5.（https://ipc.cv/fr/noticias/morna-patrimonio-imaterial-da-humanidade-no-centro-da-conversa-na-escola-secundaria-de-salineiro/）